

沖縄戦の記憶とその継承

ひめゆり学徒とハワイ、そして、あるひめゆりの教師が生きた戦後

小川真和子

はじめに：封印された写真の思い出

沖縄本島南部は祈りの地である。沖縄戦において激しい戦闘が繰り広げられたこの地では、犠牲者を弔うため、戦後、数多くの慰霊碑が建てられた。なかでも有名なのは、ひめゆりの塔であろう。ひめゆりとは、沖縄県立第一高等女学校（略称・一高女）と沖縄師範学校女子部（略称・女師）を意味する¹⁾。両校が真和志村（現・那覇市安里、ゆいレール安里駅近辺）の同じキャンパス内で校舎を共有する並置校となると、一高女の校友会誌『おとひめ』と、女師の学友会誌『白百合』も一つになり、『姫百合（ひめゆり）』と名付けられたことに由来する両校の愛称である（地図1）。

1945年3月23日、米軍が沖縄本島への上陸作戦を開始すると、ひめゆり学徒、教員あわせて240人が南風原の沖縄陸軍病院に動員された。その後、首里の日本軍司令部が南部へ撤退すると、ひめゆり学徒隊も南部へと撤退し、「ガマ」と呼ばれる壕（自然洞窟）で看護活動に従事した。しかし6月18日に日本軍が突然、「解散命令」を出したことによって、生徒たちは米軍の猛攻の中に投げ出された。なかでも陸軍病院第三外科壕に配属されたひめゆり学徒と教員は、伊原第三外科壕と呼ばれる壕に避難していたが、解散命令直後の6月19日に、米軍のガス（黄燐）弾攻撃によって42人が命を落とした。戦後、その壕の上に建立されたのが、ひめゆりの塔である²⁾（地図2）。



20万分1「沖縄県」陸地測量図 昭和8年（1933）発行より作成

地図1 沖縄本島



20万分1「沖縄県」陸地測量図 昭和8年（1933）発行より作成

地図2 沖縄本島南部

現在、伊原第三外科壕の跡地に寄り添うように、「ひめゆりの塔」と刻まれた碑と、亡くなった人々の名前を刻んだ石碑などが建っている。そしてその奥には、ありし日のひめゆりの学び舎にちなんでデザインされた、ひめゆり平和祈念資料館がある。この資料館は後述のように、ひめゆり学徒隊の生存者が中心となって作りあげた魂の産物である（写真1）。

ひめゆり平和祈念資料館の建物に入ると、入り口の壁に掲げられた一枚の大きく引き伸ばされた写真が来館者を出迎える（写真2）。生徒たちの明るい笑い声が聞こえてきそうな華やかな雰囲気醸し出すこの写真は、1944年3月25日ごろ、修了式の日野田貞夫女師校長を囲んで撮影された。



写真1 写真右端に建つ石碑が戦後まもなく建立された「ひめゆりの塔」。そのすぐ左側に伊原第三外科壕があり、左後方にひめゆり平和祈念資料館が見える。筆者撮影。



写真2 「終了式の日野田貞雄校長を囲んで」ひめゆり平和祈念館所蔵

その最前列左端の着物姿の女性は、かつて女師の教員であった私の大叔母、玉巻（旧姓・森岡）十紀子である。この写真撮影の翌年に沖縄を襲った「鉄の暴風」、沖縄戦によって、野田校長をはじめ写真に写る48人の生徒のうち、21名が帰らぬ人となった³⁾。

ひめゆりの塔が建つ現在の糸満市は、今も昔も沖縄県を代表する漁村である。沖縄県は戦前から多くの住民をハワイへ送ってきたが、特に糸満漁港の周辺からは戦後、多くの漁民がハワイへ渡ってカツオー一本釣り漁やマグロはえ縄漁に従事し、現地の水産業に大きく貢献した歴史を持っている。そのような沖縄とハワイの海を介した交流の歴史に注目してきた私にとって、ひめゆりの塔は、ハワイにゆかりのある人々を訪ね歩く合間に訪れては祈りを捧げる場であった。ひめゆり平和祈念資料館のこの写真も、当然、何度も目にしていたはずである。しかし私はそこに、幼い頃から私を可愛がってくれた「ときこおばちゃん」がいることに最近まで気づかなかった。十紀子は沖縄で過ごした日々について、家族にほとんど話さなかったためである。

あれほど闊達でおしゃべりだった彼女がなぜ、この写真にまつわる思い出を封印したのか。そして教え子に対して、彼女がどのような思いを抱き、どのように向き合いながら戦後を生きたのか、私は知りたくなった。またひめゆりの物語にはハワイも深く関わっている。そのハワイの話にも言及しつつ、本稿では、手記の執筆や慰霊碑、資料館建設などの活動を通して沖縄戦の記憶を次世代に残そうと尽力した人々の足跡を、玉巻（森岡）十紀子の人生に関連づけながらたどってみたい。

沖縄での日々

十紀子は1921（大正10）年2月11日に、三重県河芸郡（現・鈴鹿市）の鼓ヶ浦海岸近くで割烹旅館「森木屋」を営む森岡^{するじ}寿留二、よし夫婦の四女として生まれた。跡取りの男子を望んだ寿留二は4人続いた娘の出生を無念に思い、出生届の提出を放置していたところ、届出期限が過ぎてしまった。そこでやむを得ず出生日を繰り下げて17日生まれとして届け、大正10年の紀元節の日に生まれたことから「十・紀・子」と名付けた⁴⁾。なお、森岡家ではその後も女子が誕生し、6人目、7人目で男子に恵まれた。十紀子の誕生に冷淡な反応をみせた寿留二だが、男女とも子どもたちに旧制専門学校や看護学校など、義務教育以上の教育を授ける教育熱心な父親としての顔も持っていた。

唯一、私の祖母である三女の早子だけは「上の学校」に行かず、学業に忙しいきょうだいたちに代わって家業の手伝いをした。その姉の献身と期待にこたえるように、十紀子は三重県立河芸高等女学校（現・白子高等学校）で非常に優秀な成績を収め、奈良女子高等師範学校（現・奈良女子大学）へ進学した⁵⁾。そして、1942年に卒業すると沖縄師範学校女子部に家庭科の教員として赴任した⁶⁾。姪にあたる私の母には「転勤で沖縄に行った」と話していたが、当時21歳の十紀子にとって、沖縄は卒業後最初の赴任地であり、ひめゆり学徒は初めての教え子である。当時、高等師範学校の卒業生は文部大臣が指定する学校で教える義務があったため、沖縄へ向かったのであろう⁷⁾。

戦後長らく経ったある時、十紀子は私の母に、「（沖縄時代の教え子は）みんな死んじゃったのよ」と語った。また「占いの人に、運勢がいいと言われたことがある」とも話した⁸⁾。十紀子に強運をもたらしたのは、実は野田貞夫女師校長である。熊本県出身の野田は妻子を東京に残して単身赴任をしており、学校内にある同窓会館を改修した別寮と呼ばれる建物の一角に住んでいた⁹⁾。全寮制の女師で別寮の舎監を務めていた十紀子は、生徒と衣食を共にする傍ら、野田の食事の献立をつく

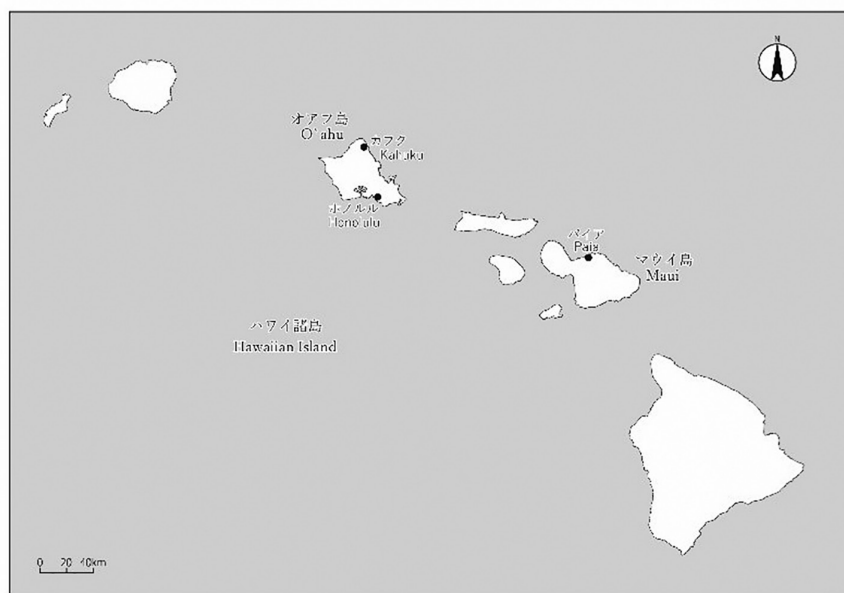
り、その指導に従って生徒たちが調理した¹⁰⁾。生活空間を共有する野田の「強い勧め」によって、それまで沖縄に留まるつもりでいた十紀子は、件の写真を携えて本土への引揚船に乗った。彼女によると、その船は本土に無事、たどり着いた最後の引揚船であったという¹¹⁾。1944年8月22日に、沖縄から本土へ疎開する学童ら1788人を乗せた対馬丸が、トカラ列島の悪石島付近でアメリカ軍の潜水艦による攻撃を受けて沈没し、1500人近くが犠牲となったように、戦時における本土への疎開は命がけであった。

三重県の実家に戻った十紀子を待ち受けていたのは食糧難である。そして病の床にあった弟が、十分な栄養も取れないまま病没した。戦後になると、十紀子は奈良女子高等師範学校時代の恩師の計らいで京都大学の助手となり、やがて銀行員と見合い結婚をした。その後しばらくの間、専業主婦をしていたが、1965年頃に園田学園女子短期大学家政科（現・園田学園女子大学短期大学部生活文化学科）の教員となると、教育者・研究者として戦後を生きた¹²⁾。

ハワイとひめゆり：親泊千代子

十紀子が勤める女師と校舎を共有する一高女に、親泊千代子教諭がいた。十紀子より一歳年下の親泊もまた、一高女の寮の舎監を務めていた。その頃の学園生活は隔々にまで軍事化が進み、アメリカとの「聖戦」に勝つための教育が施されていた。年齢が近い十紀子に、親泊は自分がハワイ生まれであることを打ち明けたであろうか。出生地主義をとるアメリカでは、アメリカ領で生まれた子どもはアメリカ市民権を持つ。二つの祖国を持つ親泊は、アメリカ人としての自分のアイデンティティに封印をし、故郷ハワイの真珠湾で始まった対米戦争を、日本人として生き抜こうとしていたのであろうか。

親泊千代子の父、元正は、沖縄からハワイへ渡った。そしてマウイ島のパイアで結婚すると、プランテーションで働く傍ら、夕刻になると妻のよしが運転する車で魚の行商に出かけた。その後、オアフ島のカフクに移動したが、その間に千代子を含む5人の子どもが生まれた¹³⁾（地図3）。



地図3 ハワイ諸島



写真3「舎監の先生方」1943年ごろ撮影。後列右端が親泊千代子、
左から2人目が十紀子。ひめゆり平和祈念資料館所蔵。

沖縄からハワイへの最初の集団移住は、沖縄本島中部の金武^{きん}出身である当山久三の強い働きかけによって、1899年に始まった。その頃ハワイでは、1885年の官約移民開始以降、山口県や広島県などの西日本出身者がコミュニティを形成しており、沖縄出身者は後発組であった。それでも親泊元正を含む少なからぬ人数の沖縄県民がハワイへ向かうと、その多くは砂糖きびプランテーションでの労働に従事した。しばらくするとプランテーションを離れて他の職に就く者も現れたが、水産業はそれらの人びとの受け皿の一つで、なかには平安座^{へんざ}出身の新里勝市のように、何隻もの漁船を抱え、ハワイの水産業を代表する人物になる者もいた¹⁴⁾。また人的流動性の高さもハワイにおける水産業界の特徴であり、米本土をはじめ他の土地に移動する者や、郷里に戻る者なども多かった¹⁵⁾。元正が、ハワイ生まれで10歳になっていた千代子らを入れて1930年に沖縄に引き上げた理由は不明であるが、よりよい生活や子どもの教育環境を求めての選択だったのであろう。帰国後、元正は那覇の県営鉄道那覇駅前（現・ゆいレール旭橋駅近辺）に「親泊元正商店」を設立し、砂糖の卸売業を営んだ¹⁶⁾。そして千代子は那覇市内の尋常小学校から一高女を経て東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）に進学した。1943年に卒業すると、千代子は母校である一高女教諭として沖縄に戻ったのである¹⁷⁾（写真3）。

米軍による沖縄上陸作戦が始まると、千代子は一高女の生徒を引率して南風原の沖縄陸軍病院に勤務した。南部撤退時には、ガス弾攻撃の後遺症で歩行困難になっていた生徒を介護し、時には得意の歌声を披露して教え子を励ましながら伊原第三外科壕まで移動したが、解散命令後の6月19日、米軍が壕に投げ込んだガス弾によって、生徒38名、教員3名と共に亡くなった。享年23歳。ひめゆり学徒隊引率教師のなかで唯一の女性であった¹⁸⁾。

ひめゆりの塔の建立とハリ－・儀間真一

日本本土と沖縄では、アジア太平洋戦争をめぐる時間軸が異なる。沖縄県では日本軍司令官である牛島満が摩文仁の丘で自決した1945年6月23日を、沖縄における組織的戦闘終結日とし、その日を「慰霊の日」と定めている。しかしその後も久米島などで戦闘が続いたため、南西諸島の日本守備軍が米軍と降伏調印をおこなった9月7日を沖縄戦終結日とする捉え方もある¹⁹⁾。もっとも住民にとっての沖縄戦終結は(米軍に)捕らわれた日であり、(米軍の)収容所に収容された日であった²⁰⁾。女師本科2年生の本村(旧姓・佐久川)ツルにとって、戦争は6月22日の朝、米兵に捕えられた時に終わった。そして収容所に移動する途中、本村は親泊千代子の祖母に「うちの千代は知らないか」と尋ねられた²¹⁾。生き残ったひめゆり学徒が、亡き学友や教員の死去を知るのは「戦後だいたいぶたってから」のことである²²⁾。「やがていらっしゃる筈です」と答えた本村は後年、「それはただの慰めにしかすぎなかった」と心を痛めた²³⁾。一方、日本の勝利を信じて彷徨を続けていた女師本科1年の仲里(旧姓・仲里)正子は8月1日の夕方、食糧を求めて入った伊原第三外科壕で大豆となべを見つけ、炒って食べた。傍には何体もの死体があったが、それらが学友たちだとは思わなかった。仲里が終戦を知り、投降したのは8月22日のことである²⁴⁾。

1946年になると、米須海岸(現・糸満市)の収容所に一高女・女師のあった真和志村の村民が収容された。同村の金城和信村長と妻、ふみの娘、信子は女師に、貞子は一高女に通うひめゆり学徒であり、二人とも行方不明となっていた。そのうち貞子が米須のはずれの伊原第三外科壕で亡くなったことが分かると、金城夫妻は村民とともに壕の遺骨や遺品、遺髪を収集し、それらを「浄魂」と書かれた箱に入れ、ひめゆり学徒を引率し生存した教師の一人である仲宗根政善に託した。金城夫妻は長女、信子も戦闘で失っており、娘たちを含む学徒や教師を慰霊するため、「ひめゆりの塔」と刻んだ慰霊碑を伊原第三外科壕の傍らに建立した²⁵⁾。

その後、ひめゆり学徒の遺族やひめゆりの塔を取り巻く政治的環境は大きく変化する。戦後、日本本土から切り離された沖縄は、琉球列島米国民政府(U.S. Civil Administration of the Ryukyu Islands, USCAR)の支配下に置かれた。そして日本本土がサンフランシスコ平和条約によって主権回復した後も、その現状は変わらなかった。そのため、多くの米軍人・軍属が沖縄に駐留したが、そのなかの一人、ハリ－・儀間真一は沖縄県読谷村よみたんにルーツを持つハワイ生まれの二世で、エンジニアとして沖縄の米軍基地で働いていた。そしてひめゆりの塔が口コミによって、地元住民のみならず米軍関係者も訪れる戦跡観光地の様相を呈し、なかには壕の中に勝手に入る者も現れる状況を見かねた儀間は、1951年に壕周辺の敷地約6,600平方メートルを購入するため、友人、知人らから寄付を募った。その寄付金を託された仲宗根政善らの尽力によって、ひめゆりの塔とその周辺の土地を地主から得ることが出来た。さらに儀間は、敷地を囲む塀の費用も工面したうえで、夜間、車のヘッドライトの明かりを頼りに自ら塀を設置した。ひめゆりの塔の保全に対する儀間の貢献について、儀間自身、親族にすら黙して語らなかったが、後年、ひめゆり同窓会は儀間への感謝の証として敷地内に顕彰碑を建てている²⁶⁾(写真4、5)。



写真4 ひめゆり平和祈念資料館敷地の入り口に建つハリー・儀間真一の顕彰碑。
「聖域二千坪と堀 儀間真一」と刻まれている。筆者撮影。



写真5 1992年に建立されたハリー・儀間真一の顕彰碑。

海を渡ったひめゆり

ひめゆりの物語はハワイへ渡った。1953年公開の映画、「ひめゆりの塔」(後述)が同年、ホノルルの国際劇場で上映されると、映画の主人公で教え子と運命を共にする「宮城先生」が、ハワイ出身の二世、親泊千代子であると地元日本語紙『ハワイタイムズ』が報じた。実際は、千代子は米軍が投下したガス弾によって命を落としたが、同紙は「愛し教え子たちと最後まで戦い遂に自決した唯一人の女教師」として紹介した。ホノルル在住の姉、静子やロサンゼルス在住の妹、敏子の声も紹介されたが、宮城先生が千代子で間違いのないこと、千代子を含む学徒隊の「清純な気持ち、崇高なる行為が日本にまで知れて」立派に映画化されたことを喜ぶといった内容であった²⁷⁾。米軍による殺害という残虐性がはぎ取られた殉国美談として紹介されたのみならず、沖縄と「日本」を切り分けて報じられた点が、まさにこの頃のハワイにおける沖縄の政治的な位置づけを物語っている。

戦後、日本本土から切り離された沖縄では、米国民政府の圧政や沖縄経済の回復の遅れなどに対する不満の高まりから、沖縄の本土復帰を求める声が高まっていた。住民の反米感情を和らげるため、米国民政府が目をつけたのがハワイである。ハワイの沖縄系住民と沖縄の住民の交流を通して、沖縄における親米感情を醸成するため、1959年に始まった「琉布ブラザーフードプログラム」はそのような政策の一端であり、1972年の沖縄返還まで、ハワイから300人ほどが沖縄に来る一方、千人を越す行政指導者や学生、大学教授、農業者などが沖縄からハワイへ渡って研修を受けた²⁸⁾。このような政治的文脈において、元ひめゆり学徒隊引率教師で琉球大学長となっていた与那嶺松助と、同大学図書館長の任に就いていた仲宗根政善が1961年にハワイを訪問すると、二人の周りにひめゆり生存者が参集した。彼女たちは沖縄駐留の日系アメリカ人と結婚するなどの理由で、ハワイに移住していたのである。これをきっかけとして、ひめゆり同窓会ハワイ支部が発足した²⁹⁾。二世との結婚を機に米本土へ渡り、1978年にハワイへ移った元ひめゆり学徒隊の末富（旧姓・玉城）文子は、「戦争体験を語る事が亡くなった友のためにできる私の任務」との思いから、ハワイでも戦争体験を語り、娘にも話して聞かせた³⁰⁾。これは米国民政府の思惑を超えた行動であった。

開封された思い出

時間の軸を少し戻そう。ひめゆりの塔が建立され、映画が話題になっていたころ、生き残ったひめゆり学徒や引率教師はどのような日々を送っていたのであろうか。戦後しばらくの間、彼（女）たちの多くは米軍の収容所で過ごした。そして1946年1月、具志川村（現・うるま市）に教員養成のための沖縄文教学校が開設されると、多くの元ひめゆり学徒と教師がそこに集った。元学徒たちは再会した学友や教師たちと、互いの無事を喜びあいながら、初等学校（小学校）の教員になるための教育を受けたのち、沖縄各地へ赴いた。

こうして少しずつ平穏な日常を取り戻していくとともに、彼女たちは亡き学友の運命について知るようになる。前野（旧姓・古見）喜代は、伊原第三外科壕での惨劇を知り、「胸が張り裂けそう」になった³¹⁾。宮城（旧姓・兼城）喜久子は文教学校で再会した一高女時代の師、与那嶺松助に促されて学徒が自決した荒崎海岸に赴き、亡き学友たちの遺骨を収集した。三つ編み姿で岩にもたれかかるように白骨と化していた亡き友の姿を目にするのは「十七歳の私にとってあまりにもつらく、重い体験」であったが、それは教員も同じであり、教え子の最期の姿を見た与那嶺はその後、沖縄戦について黙してあまり語らなくなった³²⁾。仲里（旧姓・仲里）も亡き学友のことや戦場での体験について家族にも話せなくなり、城間（旧姓・佐久川）和子は、戦場での「恐ろしく悲しい体験を忘れたいとばかり」思った³³⁾。戦後67年を経て編纂された体験集、『生き残ったひめゆり学徒たち—収容所から帰郷へ』は、生き残った学徒たちが、死線を越えて生き延びたことを喜びつつも、悲惨極まりない戦場体験からくる心的外傷後ストレス障害（PTSD）に苦しみ、さらに亡き学友らに対して、自分だけが生き残ってしまったという生存者の罪悪感サバイバースギルトに苦しんだ声で満ち溢れている。

それでも少しずつ連絡をとりあうようになったひめゆり学徒隊の生存者や卒業生らは、1948年に女師・一高女の同窓会を再編成し、「ひめゆり同窓会」と名付けた（写真6）。また1940年に発足したのち休止していた東京支部が「東京ひめゆり同窓会」として再発足すると、大坂、福岡、熊本、宮崎、鹿児島、そして沖縄北部、中部、知念、糸満、八重山にも支部が結成された³⁵⁾。さら



写真6 ひめゆり同窓会が建立した像。

師範学校女子部の付属小学校があった場所の一角にある。筆者撮影³⁴⁾。

に1951年には転機となる出来事が起きる。生き残った学徒や教員のことを訪ねては記録し、学徒隊生存者に戦争体験を書き残すよう呼びかけていた仲宗根政善が『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を刊行したのである³⁶⁾。これは亡き教え子たちの血の痕跡を記すことが彼女たちへの供養になるという思いから、仲宗根が学徒隊生存者の体験談を集めて編纂した手記であった³⁷⁾。さらに、この書をもとにした映画「ひめゆりの塔」(東映・今井正監督)が1953年に公開されると、大ヒットした。やがて「ひめゆり」は殉国美談の象徴となり、ひめゆりの塔も観光地としての地位を確立した。それは学徒隊の生存者にとって強い違和感を伴う事態でもあった³⁸⁾。

しかしその一方で、「ひめゆり」の知名度が、ひめゆり同窓会の取り組み、つまり戦場での体験を後世に残すための追い風にもなった。当初、同窓会は戦禍で失われた母校の再建を目指したが、敷地の確保や資金、維持運営などの問題のため暗礁に乗り上げていた。その傍ら、1980年7月から朝日新聞と沖縄タイムス両社の企画で、仲宗根の手記をもとにした「あれから三十五年 ひめゆりの乙女たち展」という展示会が東京、大阪、沖縄など全国9か所で開催させると大きな反響を呼んだ³⁹⁾。この展示会の図録の表紙を飾ったのは、十紀子の件の写真である⁴⁰⁾。手記や映画によって、ひめゆりの名前が広く世に知られるようになるにつれ、彼女は沖縄へ残した教え子がたどった運命を知り、写真を寄贈したのであろう。そして展示会が名古屋の松坂屋に巡回してくると見に出かけた。当時、十紀子は大阪府内に居住していたが、名古屋の会場に教え子の一人である上原当美子が来ていたため、会いに行ったのである⁴¹⁾。会場には展示内容を監修するため、ひめゆり学徒隊生存者が交代で来場しており、上原は名古屋会場を担当していた⁴²⁾。「あまりにも残酷で、昨日今日のことのように浮かんでくる」沖縄戦の記憶を抱えながら、亡き学友が果たせなかった教員になる夢を実現させ、「第二の人生を歩み出して」いた上原と再会した十紀子は、彼女にどのような言葉をかけたのであろうか⁴³⁾。

展示会終了後、主催者側から、収集した資料を同窓会に寄贈したいという申し入れがあった。収

納場所がないため断ったが、その後、特に同窓会の東京支部の強い働きかけによって、資料館の建設を望む声が強まった。そして展示会から2年後の1982年に開催されたひめゆり同窓会総会は、満場一致をもって資料館建設を議決した。展示会で多くの人たちが「泣きながら見ている」姿を目の当たりにしたうえ、戦後40年近くがたち、戦場で亡くなった恩師や学友のことを後世に伝えたいという思いが、忘れないという気持ちを上回ったのである。これ以降、同窓会は資料館建設へ向けて期成会を結成するなど、動きを本格化させる⁴⁴⁾。そして十紀子は、仲宗根政善や、沖縄戦をテーマにした小説『太陽の子』で知られる作家、灰谷健次郎らとともに、「ひめゆり平和祈念資料館建設賛助員」に名を連ねた⁴⁵⁾。

ひめゆり平和祈念資料館の設立へ向けて

ひめゆり平和祈念資料館の設立は、同窓会での議決から7年を経た1989年12月のことである。その間、もっとも大きな懸念材料となったのは、ひめゆりの塔の「霊域」性と、伊原第三外科壕の安全性を巡る問題であった。ひめゆりの塔一帯は戦跡国定公園第二特別地域となっていたため、建設予定の資料館は県の許可を得なければならなかった。

そこで期成会から業務を託された常任委員会のメンバーは、九州にある知覧特攻平和会館や神風連資料館など類似施設を視察した。特攻平和会館では「すごく誇らしげに大声で」生存者がガイドする様子を目の当たりにし、このような証言は出来ないと考えた⁴⁶⁾。さらに規模が小さいと集客力が低下するため大規模な資料館とすること、そして作られたものよりも現物を見せるほうが迫力があることから、期成会は伊原第三外科壕の展示を目指すことにした⁴⁷⁾。そのため、資料館を壕に隣接した地下に建設する案を提案したが、県側は壕の安全性を保障するデータの不足を指摘し、さらに、ひめゆりの塔の後方に資料館を建設する計画案では、塔の参詣者が資料館に出入りする人々を拝む形になるため霊域性が損なわれるとして反対したのである⁴⁸⁾。

壕の展示は「霊域の尊厳を損なう」、「どんな工法をもってしても自然破壊につながる」⁴⁹⁾と主張する県側に対して、期成会側は壕展示の安全性を示すためボーリング調査を実施して反証した⁵⁰⁾。また霊域および戦争資料館を調査するため、三輪山や室生寺、伊勢神宮、熊野那智大社、高野山、大阪府平和祈念戦争資料室（現・ピースおおさか大阪国際平和センター）を訪問し、うっそうとした木立の奥まった場所への資料館の設立をイメージした⁵¹⁾。さらに同窓会らが104,500人分の街頭署名を添えて「ガンマ展示室（ガンマ記念室）」実現を求める陳情書を知事に提出する一方、同窓会が持つ芸能界、政財界の人的ネットワークを駆使して集めた寄付金を用いて、塔に隣接する県有地を買収した⁵²⁾。これによって資料館を塔の後方ではなく横に建設することが可能となり、霊域性の尊厳の問題が解消されたが、西銘順治沖縄県知事をはじめとする県側は、壕の展示を認めようとしなかった⁵³⁾。

壕の展示をめぐる議論は、地元メディアを巻き込んで広がった。沖縄本島中西部各地に散在するガンマや、(多くの将兵が最期を遂げた)旧海軍司令部壕が自由に参観できるにも関わらず、なぜ、ひめゆりのガンマだけが「神殿」扱いになるのか、という仲本賢弘ひめゆり遺族会会長の声も地元紙に登場した⁵⁴⁾。しかし最終的にひめゆり同窓会は、ガンマ展示抜きで資料館を建設することを決意する。同窓会の議決からすでに6年が経過していた。ガンマの展示を目指す望みは持ちつつも、まずは資料館の建設を優先させることにしたのである⁵⁵⁾。

むすびにかえて：ひめゆり平和祈念資料館の設立とひめゆりの教師

1989年6月23日、小雨が降りしきるなか、ひめゆり平和祈念資料館は開館式を迎えた。会場には夫と共に列席した十紀子の姿があった⁵⁶⁾。資料館には伊原第三外科壕の実物大レプリカの他、ひめゆり学徒隊の鎮魂の場として、犠牲者の遺影とそれぞれの犠牲状況を記載した部屋も設置された。そしてなによりもこの資料館を特徴づけたのは、ひめゆり学徒隊生存者たちが「証言員」として展示室で説明にあたったことである。最初は「言葉に詰まったり、泣いてしまって話せなくなる」こともあったが、来館者が熱心に傾聴する姿や沖縄戦の惨状を初めて知った驚きに接するうちに、彼女たちは伝えることの大切さを感じるようになった⁵⁷⁾。

与那覇（旧姓・上地）百子と比嘉（旧姓・伊波）文子もそのような証言者であった。与那覇は沖縄戦で上級生を看取っただけでなく、父親と二人の姉も亡くしていた。戦後、亡き上級生の家族とともに遺骨を捜しにいくと、「亡くなった友人達が肩を抱きながらリズムに合わせるようにして私のほうに向かって」くるのを繰り返し目撃した⁵⁸⁾。比嘉もまた戦場において重症を負った下級生を後に残した体験を持ち、師範男子部に在学中だった弟を亡くしていた⁵⁹⁾。それでも二人が資料館で自らの体験談を話し続けたのは、戦場で引率教師、西平英夫からかけられた、「一人でも多く生き残って、学徒隊のことを後世に伝えなさい」という言葉とともに、「伝え続ける事が、亡くなられた方々への鎮魂」になるという信念のゆえであった⁶⁰⁾。

このような決意と行動にたどり着くためには、何十年という時の流れが必要であっただけでなく、他の生存者とともに作り上げた資料館という媒体、さらに後世に伝える事の大切さを説いた恩師の後押しなどが、「忘れない」沖縄戦の思い出を「忘れまい」とする意識へと昇華させたのである。

彼女たちの背中を押した恩師の一人に、十紀子もいたのではあるまいか。開戦時、女師本科一年生だった与那覇百子と比嘉文子は彼女の教え子である。件の写真にも映る二人は、十紀子が最晩年になるまで年賀状のやり取りなどの交流を続けた。また同窓会の大阪支部代表を務めていた新川（旧姓・仲村）初子は、十紀子が亡くなるまで毎年、沖縄のマンゴーを送り届けた⁶¹⁾。十紀子は沖縄戦を目前に沖縄を離れた。そのためであろうか、資料館開設へ向けた活動の表舞台へ出ようとせず、手記を残すこともしなかった。しかし終生続いた教え子たちとの交流は、ひめゆり学徒の記録と記憶を後世に伝えるための活動を、背後から支え続けたことを物語っている。

十紀子は長年勤めた大学を定年退職する際、名誉教授の称号は「ためらいながら」受けたが、叙勲の話は断った。長男の弘光は、戦時中に亡くなった弟、そして何よりも、沖縄戦で命を落とした教え子たちへの「何らかの思い」があったからではないかと推測する⁶²⁾。それがどのような思いであったのか、誰にも打ち明けることなく、十紀子は2014年4月29日に満93歳でこの世を去った。その深い沈黙とともに生きた彼女の長い戦後は、生き残ったがゆえの苦しみの深さと、死んでいった教え子たちに対する教育者としての責任感の重さとともに生きた日々であった。ひめゆり学徒を引率し、生き残った教師たちの多くは、戦後、強い自責の念から、沖縄戦について多く語らなかった⁶³⁾。十紀子もまた、その思いを共有するひめゆりの教師の一人であった。

注

本稿では旧漢字旧かな遣いは、新漢字新かな遣いに改めた。本稿執筆にあたって、ひめゆり平和祈念資料館の前泊克美氏、親泊千代子先生の義妹、親泊道子氏、琉球大学の野入直美氏、玉巻十紀子の長男弘光氏、そして私の母、小川和子に大変お世話になった。なお本研究は JSPS 科研費 JP21K00930 の助成を受けた。

- 1) 一高女は 1896 年に設立された私立沖縄高等女学校を前身とし、1903 年に沖縄県立高等女学校、1928 年に沖縄県立第一高等女学校（現在の中学 1 年から高校 2 年に相当する 5 年課程、1943 年から 4 年課程）となった。女師は 1896 年に首里の師範学校内に設立された女子講習科が 1910 年に女子本科、1915 年に沖縄県女子師範学校となり、1943 年に国立の沖縄師範学校女子部（現在の中学 3 年から高校 2 年生に相当する 3 年課程の師範学校女子部予科と、高校 3 年から大学 1 年に相当する 2 年課程の師範学校女子部本科）となった。1916 年に沖縄県立高等女学校の敷地へ移転して並置校となると、校長も一人となり、一部の教員は両校の教壇に立った。財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（以後、同窓会）編『ひめゆり一女師・一高女沿革誌』同窓会 1987 年 31-119 頁；吉田竹也「ひとつになった乙姫と白百合の現存在—恒久平和を念願する時限結社の超越過程」『人類学研究所研究論集』6 号（2019 年）25 頁。
- 2) ひめゆり平和祈念資料館附属ひめゆり平和研究所（以後、平和研究所）『Himeyuri and Hawaii 特別展ひめゆりとハワイ』公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団（以後、ひめゆり平和祈念財団）2021 年 4-15 頁。
- 3) ひめゆり平和祈念資料館（以後、資料館）編『生き残ったひめゆり学徒たち—収容所から帰郷へ—（以後、生き残った）』資料館 2012 年 11 頁。
- 4) 玉巻弘光から筆者へ宛てたメール、2022 年 1 月 10 日。
- 5) 小川和子、筆者との電話インタビュー、2022 年 1 月 10 日。
- 6) 島袋淑子『ひめゆりとともに』フォレスト 2018 年 38 頁；資料館編『戦後 70 年特別展 ひめゆり学徒隊の引率教師たち』ひめゆり平和祈念財団 2016 年 6 頁。
- 7) 小川；奈良女子高等師範学校編『奈良女子高等師範学校要覧』奈良女子高等師範学校 1941 年 20 頁。
- 8) 小川。
- 9) 資料館編『墓碑銘一亡き師亡き友に捧ぐ—』ひめゆり平和祈念財団 2014 年 1 頁。
- 10) 上原当美子「死んでいく同級生たち」NHK 戦争証言アーカイブス、2011 年 3 月 24 日収録。https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001130045_00000（2022 年 8 月 29 日取得）
- 11) 玉巻 2021 年 3 月 31 日。
- 12) 玉巻 2022 年 1 月 24 日；小川。
- 13) 親泊道子、筆者との電話インタビュー、2022 年 9 月 24 日、11 月 5 日。
- 14) 拙著『海の民のハワイ ハワイの水産業を開拓した日本人の社会史』人文書院 2017 年 213-214 頁。
- 15) 同 66-68 頁。
- 16) 親泊、2022 年 9 月 24 日。
- 17) 平和研究所『Himeyuri and Hawaii』21 頁。
- 18) 資料館編『墓碑銘』14-15 頁。
- 19) 川平成雄「沖縄戦終結はいつか」『琉球大学経済研究』74（2007 年 9 月）12-13 頁。
- 20) 同 1、17 頁。
- 21) 本村ツル「父の姿を見た瞬間『生きていてよかった』と…」資料館編『生き残った』93 頁。
- 22) 世嘉良利子「懸命に治療してくれた米兵に驚き」同 59 頁。
- 23) 本村「父の姿を見た瞬間『生きていてよかった』と…」同 93 頁。
- 24) 仲里正子「この海原の向こうには郷里石垣島が」同 84-86 頁。
- 25) 仲宗根『石に刻む』沖縄タイムス社 1983 年 118-128 頁；仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川文庫改訂版 2020 年 417-421 頁；普天間朝佳「コラム 金城和信・ふみ夫妻」資料館編『生き残った』158-159 頁；翁長（旧姓・善平）安子「遺骨収集とひめゆりの塔の建立」同 260-265 頁。この石碑の建立以降、姫百合は「ひめゆり」と、ひらがなで表記されるのが一般的になった。現在、ひめゆりの塔の周囲には納骨堂のほか、いくつもの像、歌碑、千羽鶴献納堂などが建立されている。吉田「ひとつになった乙姫と白百合の現存在」28 頁。
- 26) 平和研究所『Himeyuri and Hawaii』30-31 頁；同窓会編『ひめゆり平和祈念資料館—開館とその後の歩み—』

- 354 頁。
- 27) 『『姫百合』の宮城先生布哇出身と判明』『ハワイタイムズ』1953年3月21日5頁。
- 28) 拙著『海の民のハワイ』217-218頁。
- 29) 平和研究所『Himeyuri and Hawaii』29頁。
- 30) 同27-28頁。
- 31) 前野喜代「戦争はもうたくさんだ!」資料館編『生き残った』192-193頁。
- 32) 宮城喜久子「三つ編み姿の白骨に、ただ言葉もなく…」同268-272頁。
- 33) 仲里「この海原の向こうには郷里石垣島が」同90頁；城間和子「『もう死ななくてすむ』安堵感が胸に」同146頁。
- 34) 手前の本の形をした説明版には「一九四五年の沖縄戦で消えるまで、このあたりは「女師・一高女」とよばれていた二つの学校がありました。ここは師範学校女子部の付属小学校があったところです。名前も同じ大道小学校で、プールもありました。大正時代から昭和にかけて女学生たちが、夢と希望に胸を膨らませながらこのあたりの道を歩いていたのです。あの頃の面影を取り戻すことは出来ませんが、平和へのせつなる願いを込めて、文化の香り高い文教地区として、地域の方々に大切にしていきたいとこの小さな野外彫刻公園を計画しました。二〇〇二年 夏 女師・一高女ひめゆり同窓会」とある。
- 35) 吉田「ひとつになった乙姫と白百合の現存在」29頁。
- 36) 前泊克美「コラム 同窓生の消息を尋ねる文書(名簿)」資料館編『生き残った』207頁；仲田晃子「コラム いはまくら碑と仲宗根政善」同266-267頁。
- 37) 仲宗根『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』4頁。
- 38) 吉田「ひとつになった乙姫と白百合の現存在」29頁。
- 39) 那覇では「あれから35年 鉄の暴風・沖縄戦の全容」という名前の展示会となった。ひめゆり学徒隊以外にも多くの学徒隊の犠牲者がいたことを考慮したためである。本土での展示で「ひめゆり」の名前が入ったのは朝日新聞社側の意向であった。同窓会編『ひめゆり平和祈念資料館』16頁；吉田「ひとつになった乙女と白百合の現存在」33頁。
- 40) 朝日新聞社東京本社企画部編『「ひめゆりの乙女たち」展』朝日新聞社1980年。
- 41) 玉巻2022年9月10日。
- 42) 前泊克美から筆者へのメール、2022年10月21日。
- 43) 上原当美子「何年ぶりかの銀飯と忘れられない石鹸の香り」資料館編『生き残った』206頁；同「母と子の無言の再会も空しく」同289頁。
- 44) ひめゆり平和祈念資料館編『ひめゆり平和祈念資料館20周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心(以後20周年)』ひめゆり平和祈念館2010年120頁；同窓会編『ひめゆり平和祈念資料館』16-17頁。
- 45) ひめゆり同窓会東京支部『ひめゆり同窓会 東京支部55周年記念誌』ルック1995年88頁。
- 46) 資料館編『20周年』129頁。
- 47) 同窓会編『ひめゆり平和祈念資料館』44-45頁。
- 48) 同144頁。
- 49) 同122頁。
- 50) 同50-54頁。
- 51) 同96、144頁；資料館編『20周年』129頁。
- 52) 同窓会編『ひめゆり平和祈念資料館』123-124、144頁；ひめゆり同窓会東京支部『ひめゆり同窓会』108-176頁。
- 53) 同窓会編『ひめゆり平和祈念資料館』144、153頁。
- 54) 同284-285頁。
- 55) 同297-298頁。
- 56) 玉巻2021年3月24日。
- 57) 仲田晃子「ひめゆりの戦後-収容所から現在まで-」資料館編『生き残った』303頁。
- 58) 与那覇百子「亡き上地貞子さんの遺骨を捜して」同248-249頁。
- 59) 比嘉文子「清子、一緒に家に帰ろうね」同296-300頁。
- 60) 比嘉文子「ひとりでも多く生き残って後世に伝えなさい」同149頁；同窓会編『ひめゆり平和祈念資料館』375頁；西平英夫『第三版 ひめゆりの塔-学徒隊長の記』雄山閣2015年145、152頁。
- 61) 玉巻2022年9月10日。
- 62) 玉巻2021年3月28日。
- 63) 資料館編『ひめゆり学徒たちの引率教師たち』40頁。

(本学文学部教授)

Preservation of the Memory of the War:
Himeyuri Students and Teachers, Hawai'i, and the Post-War Activities of Survivors

by
Manako Ogawa

This essay will examine the commemoration of the tragedy of *Himeyuri* students and teachers who lost their lives during the battle of Okinawa in 1945 by referring to the life history of Tokiko Tamamaki (née Morioka), a former *Himeyuri* teacher and the author's great aunt. After narrowly escaping from the battle, Tamamaki talked little about her experience in Okinawa with anyone, even her family members. Despite that her survivor's guilt reduced her to near silence, she encouraged her surviving *Himeyuri* students to preserve a detailed record of their late classmates and to establish the Himeyuri Peace Museum. Her surviving students' post-war activities involved two Hawai'i-born *Nisei* Okinawans. Chiyoko Oyadomari, born and raised in Hawai'i, was the only female *Himeyuri* teacher who perished in the battle of Okinawa. Harry Shinichi Gima, a *Nisei* Okinawan from Hawai'i working for the US occupational forces in Okinawa, played a key role in raising funds to purchase the area around the cave, where Oyadomari and her students and colleagues perished, as well as the *Himeyuri* cenotaph to commemorate them. This essay will present a detailed analysis of the story of the *Himeyuri* students and teachers by focusing on the trans-Pacific flow of people between Okinawa and Hawai'i, the collaboration of *Nisei* and local Okinawans, and the sensitive aspects of the interactions between the *Himeyuri* victims and survivors.